

ディスレクシアのある児童生徒のこぼを聴く力のアセスメントアプリ“みみより”の開発

神山典子（岐阜市立加納中学校 教諭）

【研究の目的】

発達性ディスレクシア（以下、ディスレクシア）とは文字の読みの困難さをさす。ディスレクシアの子どもの中には、自分では読めないけれども、読み上げてもらったらわかる子どもが多く存在するものの、現在の日本の教育現場では、読み上げを活用して学習するディスレクシアの子どもは数少ない。そこで本研究では、「自分で読むより、読み上げてもらったほうがわかる」という子どもを簡単に見分けることができるアセスメントツール“みみより”を開発する。こうしたツールにより、読み上げが必要なディスレクシアの子どもに適切な支援の提供が期待できる。

【研究の方法】

本研究では（1）スウェーデンの教育現場における、ICTを用いたディスレクシア支援の現地調査（2）“みみより”の開発（3）“みみより”の改善点の検討を行った。

【研究の成果】

（1）スウェーデンの教育現場における、ICTを用いたディスレクシア支援の現地調査

スウェーデンの教育現場において、ICT機器は学ぶための道具の一つとなっており、その選択肢は全ての子どもに与えられている。ディスレクシアをもつ子どもだけにICT機器を使った文章読み上げの方法が提供されるのではなく、機器を使った文章読み上げは全ての子どもが使うことができる方法である。それぞれの子どもが自分に合った方法を選び、学ぶことができる環境が整えられている。アセスメントについても同様に、“リスクのある子どもだけに行くもの”ではなく、“一人ひとりの子どもの力を正しく理解し、適切な方法を用いて、全ての子どもの力を伸ばしていくためのもの”と考えられている。根拠となる理論をもとに多面的で包括的なアセスメントが開発され、アセスメント後の具体的支援方法やトレーニング方法までを含めた検討がされている。

（2）アプリケーション“みみより”の開発



“みみより”は、子どもにとって理解しやすい文字刺激の提示方法を、簡単かつ定量的に見つけ出すためのツールである。教師が教育現場で容易に実施でき、子どもにも取り組みやすくするため、タブレットを使って実施できるアプリとした。“みみより”で用いた課題は20文字程度の日本語の短文、課題文に対する問題文の意味の正誤を問うことで、文章が理解できているかを評価した。課題文は文字での提示（よむ）、音声での提示（きく）、文字と音声を同期させて提示（よむきく）の3つで提示した。以下は、みみよりの画面の抜粋である。



（3）“みみより”の改善点の検討

実施者2名が、読み書きに困難さのある成人（DD）1名とない成人（NR）1名に“みみより”を実施したところ、ディスレクシアのある人は文字を自分で読む課題での正答率が低かった。聴く力の優位性を判断する“みみより”の、妥当性が示唆された。実施者と被検者それぞれに問題点をインタビュー調査したところ、選択画面の簡素化と結果の表示の仕方の改善が必要であることがわかった。

【まとめ】

“みみより”が子どもの能力を正しく判断するかどうかの検証が必須である。今後、子どもたちに“みみより”を実施し妥当性の検証を行うとともに、支援に結び付く結果表示も加えることで、教育現場でより役立つツールに改善したい。

また、今回の開発で使用したタブレットはAndroid端末であったが、音声や画像の明瞭さや操作性、普及率を考慮し、今後は今回開発したものに修正を加えながら、iOS版（iPad版）を開発していく必要があると考えられた。